

大黒島のコシジロウミツバメとオオセグロカモメの 繁殖ペア数について

新 妻 靖 章*

The breeding numbers of Leach's storm-petrels and Slaty-backed Gulls in Daikoku island

Yasuaki NIIZUMA

Abstract

Leach's storm-petrels (*Oceanodroma leucorhoa*), Slaty-backed gulls (*Larus schistisagus*), Japanese cormorants (*Phalacrocorax capillatus*), Rhinoceros auklet (*Cerorhinca monocerata*) and Tufted puffin (*Fratercula cirrhata*) breed in Daikoku island. I estimated the breeding numbers of these seabirds in 1993-94. Leach's storm-petrels was about 580,000 pairs in 1993-94. Slaty-backed gulls was about 8,200 pairs and 6,600 pairs in 1993 and 1994 respectively. Tufted puffin bred only 1 pair both years. Rhinoceros auklet was not counted but actually bred here.

はじめに

北海道厚岸町沖の大黒島 (42°52'N, 144°52'E) は、コシジロウミツバメ、オオセグロカモメ、ウミウ、ウトウ、エトピリカなどの海鳥の繁殖地として知られている。これまで、コシジロウミツバメの繁殖ペア数の推定が1972年に阿部他 (1972) が、及び1981~82年には綿貫 (1985) が、またオオセグロカモメの繁殖ペア数については、1982年に綿貫他 (1988) がそれぞれ推定しているが、その後10年間は調査されていない。筆者は1993~94年に、本島において繁殖している海鳥類の繁殖ペア数のセンサスを行ったので、報告する。

調査地と方法

大黒島の周囲は約50~80m程の断崖に囲まれており、上部は起伏のある台地状をなしている。コシジロウミツバメは上部台地の斜面の主にエゾヨモギーエゾイラクサ群落、イワ

ノガリヤス群落、オオブキーオオイタドリ群落に巣穴を掘り繁殖している (阿部他 1972)。オオセグロカモメは周囲の断崖及びその上部に営巣している (綿貫 1988)。この島の、自然環境については、釧路市郷土博物館 (1981) に詳しい。

コシジロウミツバメの繁殖ペア数の推定は阿部他 (1972) と同様な方法で行った。ただし、1993年には、エゾヨモギーエゾイラクサ群落、イワノガリヤス群落、オオブキーオオイタドリ群落それぞれに5×2mの帯状区を2つずつ設定し、1994年にはエゾヨモギーエゾイラクサ群落とオオブキーオオイタドリ群落のみに、上記帯状区をそれぞれ9つと6つ設定し、これら帯状区内の巣穴を全て数えた。1993年には、7月4日から6日の3日間連続で巣穴前に楊子をたてておき、そのうち1日でも楊子が倒れていたら、その巣穴が利用されていたものとした。1994年には、繁殖期を通じて巣穴を手で探り、繁殖に利用しているかどうかを確認し、巣穴利用率を求めた。

*北海道大学農学部応用動物学教室

オオセグロカモメについては、北大厚岸臨界実験所の実習船で島の周囲をゆっくりと周り双眼鏡を用いて、巣にいる親鳥の数を数えた。1993年は6月24日に、1994年は6月6日にセンサスを実施した。オオセグロカモメのペリットは、繁殖コロニーに残されたものを1993年7～8月に採集した。分析方法は綿貫(1987)と同じ方法を用いた。

結 果

コシジロウミツバメの各植生群落毎の巣穴密度を表1に示す。巣穴密度はエゾヨモギーエゾイラクサ群落が最も高く、これは72年の阿部他(1972)の調査、81～82年の綿貫(1985)の調査と同様であり、81～82年の調査に近かった。また93年と94年では93年の方が全体として巣穴密度が高いが、綿貫(1985)も述べているように、この違いは年変化ではなく、93年の方が巣穴密度の高い場所を選んで調査したためと思われる。したがって、両年の平均値によって全島での巣穴数を求めると以下ようになる。島全体の巣穴数は、植生群落毎の巣穴密度に各植生面積を乗じ合計すると推定される。ただし、阿部他(1972)が求めた各植生の被覆面積が変わっていないと仮定した。全島での巣穴数は854,000と推定された。

巣穴利用率も、巣穴数の推定と同様に両年の平均とした。巣穴利用率は68.4%になり、これまでの調査で最も高い値になったが、この原因は明かでない。推定巣穴数に巣穴利用率を乗じると繁殖ペア数が更に推定され、584,000ペア数であった。

オオセグロカモメの繁殖ペア数は1993年は約8,200ペア、94年は約6,600ペアであった。1982年には、約3,500ペア(綿貫1988)とされているので、おおよそ10年間で2倍以上に増加した。

その他に、ウミウ、ウミネコ、エトピリカ等についてもセンサスを実施しているので、

これらについて表2に示す。ウミウは約210ペアで、82年の350ペアと大きな変化はない。ウミネコは、大黒島上空や周辺で飛行しているのは観察されたが、営巣は確認されなかった。エトピリカは93年には3羽、94年には2羽、その繁殖期に目撃された。ケイマフりは、82年には50羽前後繁殖していたが、93年と94年の両年とも、大黒島周辺でみられることはなかった。ウトウについては繁殖が確認されているが、繁殖ペア数の推定は行っていない。しかし、大黒島内での営巣面積を近年増やしているようである。

考 察

コシジロウミツバメの繁殖ペア数の推定は72年には約100万ペア(阿部他 1972)、81～82年には約40万ペア(綿貫 1985)、そして93～94年には約80万ペアと推定されている。各植生の被覆面積は1972年以来変化ないと仮定しているが、遷移の進んでいるところもあるので、被覆面積を正確に調べ直す必要がある。

オオセグロカモメは80年代後半から90年代の初めにかけて一度増加したが、その後減少し始めているようである。オオセグロカモメのペリット中の各餌の出現頻度を比べると、82年には魚の出現率が44.4%と最も高かったが(綿貫 1987)、93年になるゴミの出現率が55.0%(表3)と最も高く、魚は10.2%と低くなっており、餌条件も変化していると推定される。

以上、94年にはコシジロウミツバメは約80万ペア、オオセグロカモメは約6,600ペアそれぞれ繁殖しているが、オオセグロカモメについては近年減少し始めているようである。

謝 辞

調査を実施するにあたり御協力を頂いた、北海道大学理学部厚岸臨界実験所の向井 宏

大黒島のコシジロウミツバメとオオセグロカモメの繁殖ペア数について

表1 コシジロウミツバメ営巣植生毎の巣穴密度

植 生 タ イ プ	1993	1994	平 均
エゾヨモギーエゾイラクサ群落	3.15 (n=2)	1.71±0.55 (n=9)	1.97±0.77 (n=11)
オオブキーオオイタドリ群落	1.90 (n=2)	0.82±0.43 (n=6)	1.09±0.70 (n=8)
イワノガリヤス群落	1.50 (n=2)		1.50 (n=2)

巣穴密度の単位は1 m²当たりの巣穴数とする。

括弧内は調査した帯状区数を示す。

表2 大黒島における海鳥の繁殖ペアー

	1993	1994
コシジロウミツバメ	584,000	
オオセグロカモメ	8,200	6,600
ウミネコ	±	±
ウミウ		210
エトピリカ	3	2

コシジロウミツバメについては93年と94年の平均とする

±は成鳥を確認したが、繁殖については未確認

空白は未調査

表3 オオセグロカモメのペリット中の各餌の出現率

餌 品 目	出現率 (%)
ゴミ	55.0
コシジロウミツバメ	29.5
魚	10.2
他	2.0
不明	2.8
サンプル数	220

教授、佐藤富雄氏（当時技官）、諸井政弘技官、濱野章一技官、及び院生の前川 聡氏、松本好弘氏に心からお礼申し上げます。大黒島において、笠島夫妻の御理解と御援助を頂いた。また、本研究を進めるにあたり、助言を頂きそして原稿の校閲をして頂いた北海道大学農学部助手綿貫 豊博士に心から感謝する。

引用文献

阿部 学、市田則孝、清水雅男、橋本正雄、
柚木 修、小沢典夫、小沢重雄、1972.
コシジロウミツバメの営巣個体巣推定の
試み、と動物相－北海道－. 鳥、21：
346～365.

釧路市博物館、1981. 大黒島及びその周辺の
科学調査報告書. pp.1～31.

綿貫 豊、1985. 大黒島におけるコシジロウ
ミツバメの繁殖生態. 山階鳥研報. 17：
9～22.

綿貫 豊、1987. カモメ属における食性の種
間、個体群間および個体群内変異と繁殖.
北海道大学農学研究科博士論文.

綿貫 豊、近藤憲久、中川 元、1988. 北海
道周辺における海鳥繁殖地の現状. 日本
鳥学会誌. 37：17～32.